

ミュージアム 通信

祭りの華 山車巡行 ～江戸っ子が熱狂した 祭りとは?～

[企画展のご案内]
「伊東深水が見た像
一美の軌跡・素描」開催

「千代田の大奥 神田祭礼上覧」(部分)
楊洲周延 画・国立国会図書館所蔵
「神田祭」での上覧の様子。女性達の後ろに山車が二台見える。



祭りの華 山車巡行 ～江戸っ子が熱狂した祭りとは?～

江戸の「三大祭り」とは
三大美女や三大夜景、
三大珍味など、日本人は
「三大〇〇」が好きであ
る。では、江戸の「三大祭
り」といえば、何だろう
か。まず、「天下祭」と呼ば
れた、神田神社(神田明
神)の「神田祭」と日枝神
社(山王権現)の「山王祭」
が思い浮かぶ。「天下祭」
とは、「御用祭」ともい
、その名が示すように、江
戸時代、天下人、つまり将
軍の上覧を受けた祭りの
ことである。どちらの祭
りも、宮神輿を警固する
形で多くの山車が出る。
その巡行が江戸城の門を
くぐり、城内に入って、将
軍の上覧を受けるのであ
る。なぜ、この二社の祭り
が「天下祭」となったかと
いうと、神田神社は江戸
の総鎮守とされ、日枝神
社は將軍家が産土神とし
て崇敬していたからであ
る。この二社の祭りは、将
軍家及び幕府の公式行事

として行われ、催事全般にわたって、財政的にも手厚く保護を受けていたという。「天下祭」が制度的に整備されると、二社が隔年で大祭を受け持ち、山車の巡行を行うようになった(巡行がない年の祭りは「陰祭」と呼び、祭祀が中心となる)。

では、その他に、江戸の「三大祭り」というのに相応しい祭りは、どこの神社の祭りであろうか。例えば、「神輿深川、山車神田、だだっ広いが山王様」と狂歌にも歌われた富岡八幡宮の「深川祭」や、現在も大変な賑わいを見せる浅草神社の「三社祭」。また、正徳四年(一七一四)にただ一度だけ、「天下祭」として行われた根津神社の祭礼。そして、伊勢半本店 紅

ミュージアムと同じく港区に所在し、今回のミュージアム通信の主役でもある赤坂氷川神社

(以下、氷川神社)の祭礼。

これらをはじめ、いくつかの祭礼が、江戸の「三大祭り」というのに相応しい祭りであったと考えられる。寛政八(一七九七)に九六(一七九七)に行われた「神社祭礼調査」によれば、この頃、少なくとも二七社の祭礼に山車の巡行があったという。江戸の祭りの賑わいに、人々が大いに盛り上がっていた様子が想像できる。



赤坂氷川神社本殿外観・赤坂氷川神社提供

祭礼が「天下祭」化？

根津神社の祭礼は、一度だけ「天下祭」として行われた、と前述したが、氷

川神社の祭礼も、実は「天下祭」としての奉納が検討されたことがある。「天下祭」としての根津神社の祭礼の停止は、八代將軍徳川吉宗による享保の改革の一環とされている。その吉宗は紀州家の出で、江戸藩邸が元赤坂二丁目にあったことから、氷川神社を産土神として崇敬していた。氷川神社の社殿を、現在の場所に造営・遷座したのも吉宗である。寛延元年(一七四八)の町触に、「山王祭」の四月一五日への変更が検討された記録が残っている。実は、「山王祭」と氷川神社の祭礼は、どちらも六月一五日に行われていたので、氷川神社の祭礼を「天下祭」化するために、山王祭を四月一

五日に変更し、祭日を調整しようとしたのではないかと考えられている。

これは、あくまでも推測の域を出ず、実際、「天下

祭」化は実現しなかったが、氷川神社の祭礼が大祭であったことがうかがわれる。また、天保年間(一八三〇〜一八四三)に江戸市中に出回った「諸御祭礼番付」の中では、江戸の祭りとして「山王御祭」、「神田御祭」に次いで掲載され、天保九年(一八三八)に刊行された『東都歳時記』にも「山王権現、神田明神に続^{つづ}く大祭祀なり」と書かれているなど、氷川神社の祭礼の大祭ぶりを証明する記述には、事欠かない。

赤坂氷川神社の祭礼

では、氷川神社の祭礼とは、どのような祭りだったのだろうか。その賑わいと、豪華絢爛な山車巡行の様子をうかがい知ることができなのが、この「祭礼山車行列額絵」(港区指定有形民俗文化財)である。

これは、明治四四年(一九一一)に神社に奉納



「祭礼山車行列額絵」(港区指定有形民俗文化財)・赤坂氷川神社所蔵

されたものである。華やかな一三台の山車が巡行している様子が、見取れる。山車のいちばん上の人形は「日本武尊」や「源頼朝」、「恵比寿」など、神話の登場人物や歴史上の人物、神様などが題材となっている。額絵を見てみると、山車が何層かの構造になっているのが分かる。例えば、右手前に描かれているのは「猿」の山車であるが、三層構造―いちばん上に人形が載り、その下に水引

幕に囲われた枠があり、そして、最下部の枠がある、という構造^{※2}となっている。人形は二層目を上下でできるように作られていて、さらに、それらが最下部に収まる、というカラクリになっているのである。

これは、「江戸型山車」と呼ばれる、「天下祭」の山車に多く見られる構造である。このカラクリは、江戸城の城門をくぐる時に、山車の高さを調節するためのものである。城門の大きさは大体どれも同じで、高さは約四・四メートルあり、山車は、それを最低でも六回くぐらなくてはならなかった。

しかし、氷川神社の祭礼は「天下祭」ではないから、江戸城の城門をくぐる必要はない。では、なぜ人形が上下する構造となったのであろうか。確かに分らないが、「天下祭」に並ぶ祭りであった証、と考えること

もできるし、「天下祭」の山車と同じ職人が製作した、また、「天下祭」の山車の台車が売りに出され、それを購入した、などということも考えられる^{※3}。

「武蔵野」が続くのは恥

氷川神社の祭礼については、神社の氏子によって作成された「御祭礼番附留」(港区指定有形文化財)が残っているため、詳細を知ることができ。安政二年(一八五五)から文久元年(一八六一)に隔年で実施された四回の祭礼について、各町の山車の紹介やそれぞれの担当の人数、付祭り(町神輿や囃子物など、巡行に付随するもの)の内容などが掲載されている。番附を見ていると、ところどころに「武蔵野」という山車の名称が見受けられる。火事が多かった江戸では、山車が焼失し、次の祭礼までに新調できない、という

場合もあった。その場合、生け花を飾った花車を代用したのだが、それを「武蔵野」と呼んだ。何年も「武蔵野」を曳いていると、山車が新調できないことを周囲にアピールすることになってしまうのである。

山車巡行の衰退と復活

この額絵が奉納された

明治四四年が、氷川神社の山車巡行の記録として最後であり、いつ頃まで巡行が行われていたかは不明である。巡行そのものはもちろん、山車の存在すら忘れ去られ、何十年も経つた昭和五六年(一九八二)、境内にある町神輿の保管庫に、山車が眠っていることが確認された。一三台の山車のうち、完全な形ではないものの、実に九台^{※4}の山車が現存していたのである。

その後、NPO法人赤坂氷川山車保存会等の



赤坂氷川神社祭礼 山車巡行の様子。手前が日本武尊、奥が狸々の山車。NPO法人赤坂氷川山車保存会提供

川吉宗の、将軍就任三〇〇年を迎える。それを記念して、山車が警固する宮神輿(第二次世界大戦で焼失)を復元し、往時の山車巡行の様子を再現する予定だという。

今年も、九月一日(金)～三日(日)に山車巡行が行われるので、江戸の祭りの賑わいを、肌で感じてみてはいかがだろうか。

尽力により、平成一九年(二〇〇七)に、明治四四年から約一〇〇年ぶりに山車の巡行が復活した。山車の人形や水引幕、台車の修復や復元を重ね、現在、人形は「猿」以外の八つの修復が完了し、台車も三台が復元された。台車は、かつては牛が曳いていたため二輪であったとされるが、現在は人間が曳くので四輪で復元されている。平成二八年(二〇一六)には、氷川神社を現在地に造営・遷座した徳

※1 当時の将軍、七代徳川家継は、山王権現ではなく根津権現を産土神としたため、根津神社の祭礼を「天下祭」として行ったのではないかと見られている。
※2 額絵をさらによく見ると、「江戸型山車」とは異なる構造の山車が三台見られる(一番左の「源頼朝」、中央右の「日本武尊」、中央右の「源頼朝」。人形の下に三層あり、江戸型山車よりさらに大型の山車があったことがうかがえる。
※3 実際、経済的に裕福な町は、二〜三回使用した山車は下取りに出し、新規に山車を作ることがあった。
※4 「狸々」・「猿」・「翁」・「源頼朝」・「恵比寿」・「神武天皇」・「源頼朝」・「翁二人立」・「日本武尊」の九台。
※5 九月一日(金)宵宮巡行、二日(土)子ども神輿と山車連合巡行、三日(日)神幸祭巡行。神幸祭巡行では、山車の曳き手を募集している。詳しくは、NPO法人赤坂氷川山車保存会HPを参照のこと。

企画展「伊東深水が見た像—美の軌跡・素描—」

2015年10月10日(土)～11月29日(日)開催 企画展観覧料700円

この秋、紅ミュージアムでは、伊東深水(いとうしんずい)二八九八(一九七二)が描いた素描やスケッチを紹介する展覧会を開催します。

伊東深水は、大正から昭和期に活躍した美人画の巨匠として、今なお幅広い人気をもつ日本画家です。日本画はスケッチに始まり素描に描き起こし、下絵制作を経て本画に取り掛かるという工程を踏みます。画家の舞台裏である素描は、絵画でありながら観賞用として描かれた作品ではありません。しかし素描には、画家本人が被写体を見た素の情報が映し出されています。

幼少期、人物画家になろうと決心した深水は、それからというもの片時もスケッチブックを手放すことはありませんでした。

た。人物画というのは、特にデッサンの正確さが要求されます。過剰なデフォルメを嫌い、あくまでも正確な写生にこだわった深水ですが、「画家である以上対象物をよく見て魅力を引きだし、その人にか描けないものを描かなければならない」と画家の個性も追求しました。

本展は、深水の後継者であった次男伊東万輝(いとうまんけい)(一九二一～一九七〇)のご遺族が所蔵していた未公開の素描作品の展覧会です。目に付くものは全て写生したという深水の多彩なジャンルの素描の中から、美人画や裸婦、南方風俗などの人物画を中心に六〇点余を展覧します。人物の自然な動きを題材のひとつとしていた深水は、美人画においても日常のさりげ

ない立ち居振る舞いや表情の美しさを抜群のセンスで捉えています。深水にとって、女性美を象徴するような「紅点し」「白粉化粧」「結髪」などの装いに関するしぐさは、写生対象として興味深いモチーフだったことでしょう。

写生が好きで、寸暇を惜しんで写生をしていた逸話は、深水が遺した膨大なスケッチが物語っています。

「開館時間」
10時～18時(入館は17時30分まで)
※毎週金曜日は10時～20時
(入館は19時30分まで)
【協力】
鎌倉アートサロン：なかた美術館
※観覧料と引き換えに企画展パンフレットが付きます。

います。また、作品からは、写生対象としてだけでなく、人物そのものが好きであったこともうかがい知れます。伊東深水の類まれなる観察力、揺るぎない写生力にご着目ください。

伊東深水が見た像—美の軌跡・素描—
2015.10.10 Sat. - 11.29 Sun.

伊勢半本店 紅ミュージアム
東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F
TEL:03-5467-3735
http://www.isehanhonten.co.jp

Information かわら版

期間限定商品のご案内

伊勢半本店では、10月1日より「小町紅『手毬』」秋季限定柄3種(各9,000円/税抜)を発売いたします。桔梗柄に浅葱色と橙色をあしらった「花てまり」、菊を大胆に配した「菊千代紙」、魔除けの意味を持つ麻の葉をデザインした「あさのは」。お子様の七五三に、大切な方への贈り物に最適な一品です。



小町紅『手毬』あさのは(9,000円/税抜)

Since 1825 伊勢半本店 紅ミュージアム

●開館時間/10:00～18:00 ●休館日/毎週月曜日
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)
東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F
TEL&FAX:03-5467-3735
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分
<http://www.isehanhonten.co.jp>